

『天下の双福』と言われた二人の生涯 ～福知桜痴（源一郎）と福澤諭吉～

大久保啓次郎

はじめに

「明治18年（1885年）に、『今日新聞』（現『東京新聞』。主筆：野崎左文）が、当代各界の第一人者を選ぶ指名投票を募集したことがあった。1,406通もの応募があり、その結果、次の人々が「日本十傑」として当選した。

（問題）	（指名）	（得票）	（問題）	（指名）	（得票）
政治家	伊藤 博文	927	新聞記者	福地源一郎	1,098
軍 師	榎本 武揚	425	教法家	北畠 道竜	486
学術家	中村 正直	592	商法家	渋沢 栄一	596
法律家	鳩山 和夫	618	医 師	佐藤 進	565
著述家	福澤 諭吉	1,124	画 家	守住 貫魚	459

福澤諭吉と福地源一郎には8割近い票が集中し、ここに見る限り、二人はまさに人気抜群の感がある。しかしそれから1世紀以上になろうとする現代に、諭吉の令名は高く、桜痴の名を口にする人は極めて稀である。

この時、諭吉は満50歳、桜痴は満44歳、共に維新の激変期を潜り抜けた人生の、その大半の働きは終えていたのである。諭吉は慶應義塾を主宰し、『時事新報』に寄稿し、桜痴は『東京日日新聞』の発行元、日報社社長であったが、すでに、『東京日日新聞』は退潮期にあり、社長としてのポストも、あとわずか3年の命運であった。」（小山文雄著『明治の異才 福知桜痴』中央新書）

「一身独立して一家独立、一家独立して一国独立、一国独立して天下独立」は、終生変わらぬ諭吉の信条であった。日清戦争後5年にして世界は20世紀に入る。諭吉は「修身要領」を引っ提げて再び独立自尊の主義の普及に情熱を傾けたのであるが、明治34年1月に病を昂じて2月3日夜逝去した。

各新聞が一斉にその死を伝え、その功績を讃えるなかで、桜痴も当時顧問として寄稿していた『日出国新聞』（やまとしんぶん）に2月4日付けで、

「旧友福澤諭吉君を哭す」の一文を掲げた。（別紙をご参照下さい。）

{数か月を経て、『太陽』の記者鳥谷春汀は、この桜痴の弔文にもふれて、『失敗したる御用新聞記者』（明治34年5月）の中で、論吉との比較人物評を行った。それによれば、

「桜痴は才において論吉に優る。しかし、眼識の高明と意思の強固については、論吉が数等ぬきんでており、才をたのんで、放縦に流れ、謹慎の思慮を欠く

桜痴と比べ論吉は、能く利害を知れども利害の為に迷わず、能く得失を見れども特質の為に迷わず、常識豊富にして、心理上の状態円満に調和し、立言議論時として矯激に渉る（わたる）こともあれども、その行為は常経を離れず。又翁は最も心身の独立を重んじ、且つ之を維持するに足るの強固なる意思を有したれども、彼（桜痴）はこの意思の強固を欠きたり。是れ福澤翁が成功の歴史を作り、桜痴居士が失敗の人たる所以なり。」

そして春汀は、桜痴を呼ぶに「今は半ば世に忘れられたる桜痴居士」を持っていたのである。} （小山文雄著『明治の異才 福知桜痴』中央新書）

二人の生い立ち（誕生～幕末） 1835年・1841年～1867年

●論吉は1835年、桜痴は1841年の誕生で、満年齢で6歳違いである。

没したのは、論吉が1901年で、桜痴が1906年であり、寿命は殆ど同じである。

●幕末（1867年）までの二人の生い立ちを見ると、この期間は二人共充電期間であり、同じような道を歩んでいるが、桜痴の方が父親（苟庵=医師1862年没）

が長崎で知人＝有名人が多く、桜痴が江戸に出て幕府に出仕してからは、論吉よりも恵まれた環境にあった。二人共幕臣となったが、桜痴の方が位は数段上。

●語学は二人共、それぞれの師から漢学、蘭学、を学ぶが、英語は同時期（1859年）に二人共、森山多吉郎に師事する。しかし、論吉は環境に恵まれずやがて独学で勉強する。

●外遊については、この時期に、論吉が3回（アメリカ2回、ヨーロッパ1回）桜痴は2回（2回ともヨーロッパ）渡航している。1862年のヨーロッパ使節団では、論吉は幕府の翻訳方として、桜痴は通弁方として同行している。

●幕臣としての地位では、論吉が最後まで「外国奉行翻訳方」であったのに対し、桜痴は御家人「外国奉行支配同心格」（1860年）から「外国奉行お目見得以上」（1866年）にまで昇格した。

●幕府に対する二人の態度では、諭吉はヨーロッパから帰国後の3年間（1864年～1866年）は幕府を支持し「幕府強化論」を唱え、1866年には「長州再生に関する建白書」を幕府に提出するくらいであったが、1867年6月にアメリカから帰国後は公然と幕府打倒を叫ぶようになる。

これに対し、桜痴は終始強硬なる幕府支持者であり、1867年徳川慶喜の大政奉還に対しては真っ向から反対し、小栗上野介に対し、鳥羽伏見の戦いに先立ち、「京都進撃戦略」を進言するも不採用となる。

●二人の私生活は極めて対照的で、諭吉は生涯一夫一婦制を貫いたが、桜痴は若い時から、遊郭（主として吉原）に入り浸り、20歳（1861年）の頃から、本名「源一郎」から「桜痴」の号を使用し始めた。吉原の妓・「桜路」の名前の一字を採ったと言われる。

●「学習塾」の経営では、福澤が1858年に築地鉄砲洲の奥平家で蘭学塾を開いた（慶應義塾大学の起源となる）のに対し、桜痴は、幕臣のまま下谷二長町に語学塾（英語と仏語）を開くが、幕府に二者択一を迫られ、間もなく閉鎖する。

●二人共、文筆力があり、生涯を通しては、論文、見聞録、小説など多数残しているが、幕臣時代には福澤がヨーロッパ見聞録などを『西洋事情』や『唐人往来』にまとめ、国民に西洋文明を広めているのに対し、桜痴は幕府に外国出張報告書を出しているだけで、国民向けの本を出版していない。しかも幕府へ提出した書類は、幕府消滅と共に全て焼却されてしまった事は残念である。

栄光～挫折（明治維新～明治14年の政変） 1868年～1881年『13年間』

●桜痴は、幕臣時代に渡航経験で見聞した実績や語学力（英仏語）を活かして文筆業に転身する。一つは新聞の発刊である。二つは学習塾の開塾である。さらにもう一つは得意の語学を活かした翻訳業である。新聞は「**江湖新聞**」と称し、幕府を辞した後も相変わらずスタンスが幕府寄り、佐幕的立憲政治論を振り回し、新政府を批判したため投獄された後、早々と廃刊に追い込まれた。開塾は二度目で湯島天神に「**日新舎**」を開き英語と仏語を教えた。評判は非常によく、ここで**中江兆民**と出会い、彼を教頭にする。しかし、学習塾の経営にも熱が入らず、中江兆民に任せっぱなしで、相変わらず「吉原通い」が続いたため、経営が成り立たなくなり、「日新舎」を榊原某に譲って身を引いた。榊原はなかなかの経営の才があったか、南部信民という旧大名を校主にして、これを立て直し、名前も「共貫義塾」と改めて大いに繁盛させたと言われる。福澤の「慶應義塾」、中村敬宇の「同人社」と並んで、東京の三大学塾と称さ

れた程であつたらしい。

翻訳業の方も好評で、旧幕時代からの知り合いで、当時大蔵省の官吏であつた**渋沢栄一**の依頼で『会社弁』の翻訳を行つた。これは「銀行論」で当時の渋沢にとっては金玉にも代え難い手引きとして、桜痴の名訳に驚かされたらしい。

渋沢は、これほどの才物を市井におくのは惜しいと思つて、大蔵省の上司である伊藤博文に紹介したところ、二人は意気投合し、更に伊藤から桜痴は大蔵省入省の勧誘を受け、いきなり月俸250円の大蔵省御用掛となつた。

●桜痴の維新後の外遊は2回ある。1回目は1870年（明治3年）伊藤博文に従い、銀行・会社・国家会計・金融等の調査を目的として行つたアメリカへの洋行であり、2回目は1871年（明治4年）で、引き続き大蔵省一等書記官として岩倉大使に従つて行つた米欧への外遊である。

ここで桜痴が使節団から受けた特命事項は、「トルコ・エジプトでの立会裁判

（陪審制度）の見学」である。尚、イギリス・フランスにいる間に、新しく新聞について、細心の注意を払つて勉強し、又多数の有名人と接触したほか、フランス語の旧師ロニーとも再会した。

エジプトからついでをもつて、イタリア・ギリシャ・小アジアの地も歴遊し、ボンベイに出てインド大陸を過ぎ、カルカッタ・シンガポール・香港と順路を経て1873年7月上旬に帰朝した。（1870年～1871年&1871年～1873年）

◎ 実は、岩倉使節団としての福地桜痴の外遊には後日談がある。

「一等書記官として伊藤副使の随員となつて参加した大蔵省御用掛の福知源一郎の場合は、福地が洋行体験者の大才物だけに、伊藤が随行を熱望すると、大蔵省を預かる大蔵大輔の井上馨が猛反対して木戸に訴え、木戸も井上の阻止に同調して、大久保・大隈の助けを求めたが、伊藤がどうしても断念せず、遂に二等書記官として随行した。」

（渡辺幾治郎著「岩倉大使一行の随員1詮考～福知源一郎を争う～」＜渡辺『明治史研究』昭和9年刊、所収＞） *

* 「しかし、井上馨が反対した理由は、「福地は随員としての資格が無い」からではなく、伊藤不在中の大蔵省を引き受けた井上は、源一郎に残つて、「銀行設立」の仕事をしてもらおうという腹づもりだったからである。」（柳田 泉著『福地桜痴』吉川弘分館）

◎ 又桜痴は、明治13年に岩倉使節団随行者の集まりで演説して、下記の如く述べ、岩倉使節団の役割を高く評価して随員としての役割を果たした。

「明治初年の政府は突飛な改革をやった。それは使節の留守中の事である。是は突飛家が勝を占めたところの有様、あの勢いで若し日本が行ったなら、日本は木に竹を接ぐと云う風になったのであるが、併しこの突飛論が止んで秩序的に進むと云うことになりましたのは外でもない、岩倉公の使節一行の土産である。……シテみれば、日本の秩序的な文明、秩序的な開化と云うものは、即ち明治4年岩倉大使の此の一行のお土産であると、斯う私は客観的に歴史家として考えます。」 {『朝野新聞』明治13年2月7日}

●論吉はこの時期の外遊は無く（と云うよりも、明治維新以降の論吉の外遊は一切無い）幕臣時代の外遊の経験を活かして、専ら西欧文明の日本への導入に精力を注ぐ。

1858年に築地鉄砲洲に開塾した蘭学塾を、1868年に芝新銭座に移し、「慶應義塾」と命名する。その後1871年には三田に移し、論吉も転居する。攘夷派の集団として期待していなかった明治新政府が、明治4年に「廃藩置県」を実行した事に驚き又感激し、自分も「世の為人の為国の為に尽くそう！」と奮起し、以後は日本の文明開化に邁進する。（文筆業「書籍」で国民に訴える。）

明治5年『学問のすゝめ』初編を刊行して、国民は自由平等である事、国民は学問に励む事、独立心を持つ事を訴える。（一身独立して一国独立する。）明治8年には『文明論之概略』を刊行して、西欧文明（物質文明&精神文明）を各自が導入する事の意義（目的は独立である。西欧文明を取得する事は手段である。＝独立の為に西欧文明を取り入れる）を国民に訴える。

明治13年には「交詢社」を起こし、スピーチ（演説）の重要性を訴える。

●1873年（明治6年）7月に桜痴は帰朝したが、その少し前の5月に、井上と渋沢は辞職していた。大蔵省内での財政意見の衝突が辞職理由であった。その後、岩倉使節団の外遊で親しくしていた木戸孝允も、政府内での意見の不一致があり、政局を見限り辞職した。これらの状況に刺激されて、桜痴も引退の気持ちを強め、辞職を決意した。これを聞いた伊藤博文は辞職を思いとどまるよう説得したが、時局の変動も勘案し、明治7年3月辞職に踏み切った。

しかし、辞職しても当面仕事はなく、強いて面白さを求めて、一時離れていた吉原や芸者遊びの風流生活にふけり、なけなしの財産を消失した。

この時に、天から降ったように湧いてきたのが「東京日日新聞」への入社

勧誘で、官吏をやめた桜痴は、ここで初めて、**新聞記者としての天職**を得ることになる。（1874年=明治7年12月主筆として入社）

●今や官界に絶望して官吏を辞職した桜痴は、本式に新聞記者となって、新聞を機関として筆に任せて書きたててやろうと考えていた。

この頃は、民権論の起こり始めの時期で、新聞では政府に反対する方が人気が高い。桜痴が「東京日日新聞」に入社する時も、論吉は、彼に忠告して、「政府に近づくな！」と云ったという。しかるに、桜痴はその反対に出た。

彼は官吏時代のコネを生かして、初めから政府に接近し、大いに政府に利用されようとした（御用新聞）。1875年=明治8年には発行部数が急上昇する。

1876年=明治9年には社説に社長と署名するようになる。1877年=明治10年の西南の役では、桜痴自ら戦地に出張し、山県参事の配慮で戦報を採録し、それを東京日日新聞で報道する。これにより東京日日新聞の人気は大いに上昇する。その後木戸の薦めで、京都御所にて明治天皇に、戦況奏上の栄を賜う。

1880年=明治13年は、歴史上、民権勃興（自由民権運動）の年となったが、桜痴の新聞は依然として上昇を続けた。この時期になると、桜痴はようやく政府と疎遠となり、政府の政策・施設に対して、是々非々の立場をとるようになった。

●1879年=明治12年に論吉は、報知新聞の社説に「国会論」を掲載したところ、にわかに全国各地で国会開設運動が活発化して、自由民権運動に発展し、過激になってきた。論吉は過激化した民権運動を好まなかった。

伊藤、井上馨、大隈の3人も福澤と同様な考えであった。そこで、彼等3人は福澤を抱き込み、彼に「新聞発行」を依頼し、（国会開設を前提に）過激な自由民権運動を牽制しようとした。国会開設と憲法制定では、大隈V伊藤・井上馨では意見が異なり、国会開設の時期に関しては、大隈は急進論で、伊藤他は漸進論であった。憲法制定では、大隈が英国型憲法、伊藤他がドイツ型憲法を推奨していた。福澤は大隈と同意見だと思われていた。したがって、大隈・福澤V伊藤・井上馨の争いになった。そんな時に「北海道開拓使官有物件払下事件」が発生した。この事件を「明治14年の政変」と云う。事件の経過等の詳細は、省略するが、この「政変」の結果は、大隈罷免、開拓使官有物件払下中止、国会開設時期は明治23年、憲法はドイツ型憲法で決まった。と同時に、伊藤の黒幕として暗躍した井上毅（こわし）が、「明治14年の政変」を利用して、福澤の文明開化思想を完全に葬り去る事（「人心教導意見案」→「教育勅語」）に成功した。当然ながら、論吉への「新聞発行」も雲散霧消と化した。

●桜痴は伊藤が新聞（官報発行）依頼を自分の所でなく、論吉の所に持って行った事にショックを受けた。しかし、この時の自分は政府と疎遠の関係であり、やむを得ないと判断し、むしろ民間の意見に耳を傾けるようになった。そして「北海道開拓使官有物件払下事件」では、政府を批判する演説をあちこちでやり、民間大衆の喝采を博した。しかし、「明治14年の政変」が一段落すると、伊藤との関係を修復し、「東京日日新聞」も今度は又政府ベッタリの、御用新聞となった。桜痴は民間大衆から「裏切り者」と呼ばれ「東京日日」の人気は漸落に向った。そこで桜痴は従来の組織株主を一変させ、官の味方となる株主で固め、完全な政府系の新聞にしたが、政府の反応はいま一つであった。

挫折～終焉（明治15年～明治34・39） 1882年～1901年・1906年

（福地桜痴）1882年～1906年『24年間』

●明治14年から15年にかけて、民権熱が全盛となり政党時代に入った。自由党の出現は最も早く、14年10月で、板垣退助を党首とした。15年3月には、東京に大隈重信を党首とした立憲改進黨が起こった。桜痴は主義として、急進的民主説を論敵として新聞で争う以上、敵が政党を組織すれば我も組織すべし、我が主義のためには一步も譲ってはならぬという態度を堅持していたから、ここに至って、15年3月、東京に於いて立憲帝政党を組織し、その党議・綱領を発表した。

この立憲帝政党は、実は内閣と主義を同じくし、これと連絡があったもので、当時の内閣の岩倉右大臣、長州閥の伊藤・井上・山県などがその黒幕となっていた事は、誰しも疑う余地が無かった。要するに桜痴の政党結成は、最初から政府党を志していた。この段階で、世間からは「東京日日」も帝政党の機関紙と目される有様であった。しかし、帝政党は結党後1カ月も経つか経たぬうちに、政府から離縁の動きが起こった。山県有朋が内閣法律顧問のボアソナーズの意見を聞いて、その意見を政府に奏上し政府がそれに同調したからであった。

その意見とは「政府や官吏は主義を同じくする政党に対して間接に保護することがあっても直接に関与してはならない。もし関与すると、第一に政府が統御する区域を狭くする恐れがあるし、第二に反対党を刺激して国会開設に不測の異変をもたらしかねない」という超然主義の立場からの意見であった。

●「14年の政変」前後から桜痴が新しい時代への目論見として持ったのは、

「政府党」の構想と「政府新聞」の企画であった。この二つの武器によって、側面から伊藤博文を応援して、年来の主張の漸進主義を一層具体的に推進したい、そしていよいよ颯爽と世に立とうと考えたのである。

ところが、一方の「政府党」が無残に終わったと同じように、「政府新聞」の企ても又不発に終わった。

この桜痴の新聞構想に歯止めをかけたのは、またしても山県有朋による官報発行についての政府への上申であった。

政府は官報を発行してその主義政策を明示し、官報発行の所以を示して国民を誘導すべきである。同時に、それとは別に、民間の会社を助けて私報を発行させ、陰に政府の機関とし、官報と並んで、邪説をくじき。正論を盛りたてさせなければならない。」というのが、山県の上申の趣旨である。

これを知った桜痴は早速、山県のもとにかけつけ、「東京日日」を官報にして欲しいと頼んだが、事はすでに決定している様子なので、せめて印刷と販売の委託をと願ったがそれも聞かれなかった。ただ「私報」については山県も、桜痴の事を考えている口ぶりであったが、それさえもいつのまにか立ち消えてしまった。

こうして明治16年（1883年）7月2日に「官報1号」が発行され、それから3カ月と経たぬ9月24日に立憲帝政党は解散を公示し、桜痴の新しい時世への手がかりは、二つながら断ち切られてしまったのである。

桜痴によれば、「東京日日新聞」が発行部数を最も伸ばしたのは、明治13年～14年にかけてで、総数1万2千部にまで達したが、その後は下り坂となった。

そして結局、明治21年7月10日、社長職を関直彦に譲って退社する。

●明治21年（1888年）「東京日日新聞」を退社してから18年間は、文学者として余生を送る。文字通り『文壇と梨園の人』になる。（1889年～1906年）

（尚、桜痴が残した主要作品（戯曲、小説、翻訳、歴史）については、別紙『福地桜痴の生涯』の3頁→駆け抜ける栄光をご参照ください。）

（福澤諭吉）1882年～1901年『19年間』

●明治13年まで順風満帆であった諭吉の生涯は、井上 毅の謀略により、「明治14年の政変」で大きく狂わされる。（文明開化思想の普及に暗雲。）

しかし、福澤諭吉の理念である「独立自尊」と云う生き方は生涯貫く。明治15年（1882年）には、新聞社を設立し「時事新報」を発刊する。

当然であるが、桜痴の「東京日日新聞」のように、政府の立場から事物を見

て論評する御用新聞ではなく、「官民調和論」の考え方にに基づき、中立の立場で自ら社説を書いた。

この頃から「朝鮮の文明化」に深く関与し、「朝鮮の独立」問題に首を突っ込む事になる。「なぜ朝鮮の独立問題にのめり込むのか？」論吉の解答は明快である。

「当時、西欧によるアジア植民地化は着々と進んでおり、中国までその手が伸びていた。そのうちに朝鮮も西欧により植民地にされるだろう。朝鮮が焼失すれば、その火の子は日本に飛び火するであろう。そうならないうちに手を打つ必要がある。」と考えたのである。

したがって、明治17年（1884年）に朝鮮で甲申政変（朝鮮の独立党によるクーデター）が起きると、論吉はこれに関与し、金玉均や朴永孝などの関係者を強く支持する。そしてクーデターが失敗すると、『脱亜論』他を発表し、朝鮮の守旧派（独立に無関心な人）を強く批判する。

明治27年（1894年）に日清戦争が勃発すると、「これは文野の戦争である」と称して、朝鮮の独立に反対の立場を採っていた清（中国）を強く批判した。

その間、論吉は日本政府と一緒に朝鮮の「内政改革」にまで手を差し伸べて朝鮮の独立問題に首を突っ込んだが結局旨く行かなかった。

●人生の末期の段階で、二人の生涯を対比してみると、人生の初めに論吉と桜痴が共通して経験したものは、外国語の習得、外遊、幕臣生活、学校経営、新聞社経営、著名人との交際、著述業等々で、似たような経験が多い。しかし、最終段階では、桜痴は、学校経営と、新聞社経営を、断念し、最後は、著述業のみに、専念している。論吉は、やり始めた全ての経営を継続している。

桜痴が携わり、論吉が断固拒否した職業は、新政府の役人（官職）である。
「才能は桜痴が論吉よりも優るが、意思の強さは論吉が桜痴よりも数等上だ。」

二人の能力を考察すると、人生では「能力」より「意思の強さ」が重要なのか？

おわりに

{福地桜痴の葬儀は、明治39年1月8日に執り行われた。その日は朝から晴れわたり、冬には珍しく暖かい日であった。・・・・増上寺本堂に用意された数百の椅子はたちまち埋まり、多くは堂外の広庭に居並んだ。読経・引導に続いて、桜痴の肝煎りで創立された育児院福田会の孤児たちが、「清き御国に生まれ行く」と可憐に唱歌を歌って人々の涙を誘った。伊藤博文、井上馨、板垣退

助といった第一世代の政治家に加えて、桂太郎、原敬らの第二世代の顔も見え、代議士・新聞記者・文士・出版人・あるいは陸海軍将校も、さらには、菊五郎や団十郎の養子福三郎等々の俳優たち、そして新橋待合五業組合の幹部たちと、

まさに社会の上中下流を籠めた一小天地が現出された。会葬者二千余名の一代の盛儀であった。その頃『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に連載して文名の上りつつあった夏目漱石の顔もその会葬者の中にあった。

但し、その後知人への手紙に書いた感想の内容は手厳しいものであった。

「源一郎福地と云う男が死んだ。今の学士や何かは学問文章共に出来るが、女を口説く事と借金の手紙を書く事をしらないという演説をやった男だそうだ。死んでも惜しくないひとですね。」そして、また一月ほどして、別の知人に「・・それから、福地桜痴の幕末記事は今売っているかね。いくらで、どこで売っているか教えてくれ給え」と少し関心を示したが、続けて・・・・

「桜痴と云う人の逸話を読んだが、あれは駄目な人間だ。然し当人は余程偉いと思っている。生前はかなり有名でも死ねばすぐ葬られる人間だ。」（『夏目漱石全集』第14巻：岩波書店）→（小山文雄著『明治の異才 福知桜痴』中央新書）}

『問題提起』

◎桜痴の「運命の歯車」はどこで狂ったのか？

今日、福澤諭吉は、1万円札の顔にもなっている事もあり、福澤諭吉の名前を知らない人は殆どいないであろう。しかし、福地桜痴（源一郎）の名前を知っているか、知っていてもその人物について語れる人は少ないのではないか？

早熟の才に恵まれ全盛時代には、大記者・新知識人として活躍した桜痴であり、その後の人生も決して世に埋もれていた訳ではない。

それでいて、生前から忘れられた人として、遇されたのは何故か？
福地も福澤も幕末の洋行をはじめ、何度か人生の軌跡を交叉させている。どこで桜痴の「運命の歯車」が狂い二人は離れて行ったのか？

世に立つとは何か？ 才能とは何か？ 意思の強固さとは何か？

◎ これらの問題を、皆様と一緒に、考えてみたいと思います。

